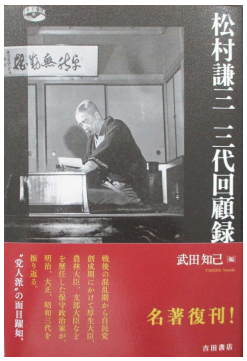
武田知己編『松村謙三　三代回顧録』 吉田書店、2021 年

松村謙三没後 50 年記念誌編纂委員会編『山高水長　松村謙三と中国』 南砺市教育委員会・松村記念会館発行、2021 年



戦前、立憲民政党政務調査会の活動拠点であった政務調査館（櫻田會の前身）に関わり、後に政務調査会の会長を務め、戦後には政務調査館なきあとの櫻田會理事長ともなった松村謙三（1883-1971　富山県福光町（現・南砺市）出身）は、回想録『三代回顧録』を後世に残した。同書は、1958 年 1 月 1 日から 4 月 24 日まで、次いで 1961 年 2 月 20 日から 9 月 16 日まで、合計 2 度にわたって「北日本新聞」連載された同名の連載をまとめたものである。連載記事は、かつての議員会館で松村が毎回 2 時間、北日本新聞の記者二人を相手に語り下ろし、旧友の土田恭治に整理させたものだという。その原型は、今風にいえば、郷里のジャーナリストによる松村へのオーラルヒストリー（口述史）であった。松村家に残された連載原稿からは、質問が交わされ、聞き取りがなされたというよりむしろ、松村が縦横無尽に語り下ろしていた様子が窺える。また、筆者と松村記念会館の 2 箇所で現在整理を進めている松村謙三関係文書には、連載で言及している記録、また、それに関連する記録が数多く含まれており、語り下ろしの際松村が記録を参照した形跡もみられる。

連載時から郷里で高い人気を得ていた「三代回顧録」であったが、単行本として刊行されたのは、数年の時を経た 1964 年 9 月であった。刊行元は盟友石橋湛山とも関わりの深い東洋経済新報社。政治家の回顧録があまたある中、名著の一つといわれる同書を、筆者は　2021 年 8 月の没後 50 年を記念する記念出版として復刻した。

ところで、政治家の回想録の持つ意味とは何だろうか。政治家は、回想録を残し、自らの政治責任を語るべきだ、という意見がある。政治家の評価はその業績によって定まるものだから、その時々の政治判断についての弁明を残しておくべきだというのである。おそらくはその通りであろう。しかし、歴史研究における回想録の有用性はそれに留まるものでなく、私たちは三つの論点を考えることができるのではないだろうか。一つは、それがその政治家しか知り得ぬ事実や政治の見方を伝えるかどうか。二つ目は、メディアや公的な記録からは伝わりにくいその人となりを伝えるかどうか。そして三つ目に、その回想が、日記や書簡など、その人物の私的な記録の解読に役立つかどうか、である。

実は、松村謙三という政治家はまさに、「己を虚しくし、専心上官や組織の意図を達成することに勉めた政治家であった。フランクリン・ルーズヴェルトのスピーチライターであったハリー・ホワイトのいう「匿名の情熱」（A Passion for Anonymity）を多分に持っていたが、それは、松村が町田忠治の秘書やさまざまな団体・行事の事務局長格として抜群の活躍を見せことと無縁ではない。あるいは、彼にはある種の宗教的信念のようなものがあったのかもしれない。このような松村であるから、回想録においてすら、その時々の政治的意図や足跡を詳細に語ることはなかった。その意味で、『三代回顧録』は松村の足跡の詳細な記録とはなっていない。他方で、彼が見た政治家の姿や世相の記録として独特の個性を放っている。『三代回顧録』は、つまり、彼の哲学や世界観がその記述や行間を通してよく伝わる記録なのである。

同書の解説において筆者は、そこに現れる松村の個性を、戦前の改進党から立憲民政党に至る系譜に属する保守主義者のそれと定義した。本書の中では、大隈重信、町田、永井柳太郎といった、いわゆる「第二保守党」の足跡に連なる政治家や、忘れられた早稲田系の人物が躍動しており、あふれる愛情をもって追想される。回想録というものは、新聞や雑誌、公的記録、私文書との突き合わせによって歴史的現実を再構成する重要な手段となる――難しい言い方をしたが、歴史家が歴史を書くときには通常こうした作業がなされている――と述べたが、『三代回顧録』が再現しているのは、自由党－立憲政友会に連なる保守政治の軌跡ではなく、また、革新政治の姿でももちろんなく、日本に存在したもう一つの政治の姿だ。

では、その姿とはどのようなものであろうか。それは、自由党－政友会よりもはるかにリベラルでありつつ、無産政党や戦後の革新系のような急進的な革命性を持たないものであった。そうした路線は、両者いずれからも「微温的」と見なされた。しかしそれは、日本が、左傾化することによって良き伝統までを破壊することを防ぎつつ、極端に右傾化、保守化することによって世界に警戒感を与えたり、社会的弱者や格差に無関心になったりすることに対して強い警告を与えることを意図していた。松村が体現していたのは、漸進主義的で、バランサーとしての役目を果たそうとする政治の姿であったといえる。

それは対外的には、欧米文明に従属して東洋を顧みない態度を是とせず、アジアの一員としての立場と先進国としての立場をバランスさせようとするものであり、日本の国際社会におけるアイデンティティを、戦前の東西文明融合論や自由主義諸国の一員でありつつアジアの一員でもあることに置く、戦後の外交三原則と適合的であった。

戦後、中国問題に尽力したのも、松村が親中派であったからというよりも、戦後の日本外交の基調が対米協調一辺倒になることを警戒したからにほかならない。松村のそうした中国との関わりを、戦前の家族宛書簡や郷里での演説記録、戦時中の松村日記や郷里の新聞記事などを用いてまとめた『山高水長　松村謙三と中国』（南砺市教育委員会・松村記念会館発行、2021 年）が、昨年刊行された。筆者も、整理中の資料の一部を提供してその刊行に協力することができた。

今後は、櫻田會のウェブサイトにも松村の関係資料の一部を掲載する計画である。こうした一次資料の利用により、松村の足跡をさらに詳細に再構築することができよう。その時、本書『三代回顧録』の価値はさらに増すであろう。昨年度の記念事業にはそうしたことへの思いが込められている。関係資料の本格的利用が進めば、21 世紀の日本にも多くの松村ファンが生まれるであろうし、その研究の進展によって、それぞれの政治的立場の良さを認め合いつつ、不偏不党の立場を貫いてきた櫻田會の創設理念の持つ意義が、今に続く極端な分断の世界において、その輝きを一層増すに違いない。

大東文化大学法学部教授　武田知己